

『研修病院の本懐』

西脇市立西脇病院

病院長 岩井 正 秀

毎年秋になると、落ち着かない気分になる。来年度の採用に向けて臨床研修のマッチングが始まるからだ。来年春に卒業予定の医学生が果たして何人、西脇病院を希望し就職してくれるのか、それが決定される時期なのである。私たちが面接や小論文などで審査を行い、当院で是非働いてほしいと思ひ、また医学生の側も当院で研修したいと希望したときに、そこでマッチングが成立することになる。

今年の春には、九人の研修医が当院で初期研修を開始した。これは過去最高の受け入れ人数であった。十数年前、新臨床研修制度が始まった頃、新人の就職が二人か三人であったことを思うと誠に喜ばしい限りである。

かつて西脇病院は昭和五十年代から研修医を受け入れており、そこで多くの医師たちが臨床能力を培っていった。当時は研修病院の選定に関しては、常に大学病院が介在しており、指示された病院に赴くのが一般的であった。しかし、そのシステムが新臨床研修制度の導入により大きく変化し、研修医が自分で病院を選べるようになったのである。そのため当初は、地域の病院は敬遠される傾向が著明となり、西脇病院もその影響を大きく受けたのであった。

しかしながら、そのように研修制度が変わった後も、当院の医師やスタッフ、また西脇市の行政や医師会をはじめとする様々な組織においては、たとえ少ない研修医であっても、彼らを大切に育てていこうという姿勢は変わらなかった。やがてその結果として、当院で研修をした医師たちが、他病院の同僚や後輩に良い研修ができたと言ってくれるようになったこと、また実際、研修後の彼らの臨床能力が優れていたことなど、それらが要因となって、再び、徐々にではあるが当院を希望する研修医が増えてきたのではないかと考えている。そして、そういった良い研修ができるためには、患者さんを始め、その家族や当地の住民の皆さんの臨床研修に対する深い理解が不可欠であったことは言うまでもない。

初期研修の二年間は専門とする科が決まっていないこともあり、研修医も色々な考え方を持っている。指導医たちはできるだけ各研修医の特性に合わせた指導を行うように努力しているが、当院の規模では一度に受け入れる人数は、やはり十人以上が望ましいだろう。それ以上になるとどうしても目が行き届かないおそれがある。リスクを最小限としながらも、様々な臨床経験を積みせなくてはならないし、各人の技量の進捗状況も決して一定ではないからだ。しかし二年間の研修が終わるころには、多少の差異はあるにせよ、期待していた所までは誰もが成長しており、それを感じるのはとても嬉しいことだ。

これから先、彼らが多くの患者さんに接し、治療して喜ばれるとす

れば、そこには私たちの努力も、わずかながらでも寄与しているのだと信じている。そして、その一点のみをとっても、こうして長年研修病院で働いていることの意義があり、そのことが私たちが指導を続けていくことの大きな動機づけになっていると言っても過言ではない。西脇病院で研修した先生達が、やがてさらに成長して、何処かの地で活躍しているという話を耳にしたら、その時は、「あの先生には、私達が注射器の持ち方から教えたんですよ」と、そう胸を張って言いたい、思うのである。

アメリカのトランペット奏者であり、ジャズ・シンガーでもあるルイ・アームストロングは、「ホワット・ア・ワンダフル・ワールド」という曲の中でこう歌っている。

『赤ん坊の泣き声が聞こえる。

私は彼らが成長していくのを見守る。

やがて彼らは、私が知るよりも遥かに多くのことを学んでいくだろう。

私は一人、心の奥深く思う。

ああ、なんて素晴らしい世界なのだろう』

2019. 11. 30